情報媒体としての浮世絵

―― 浮世絵とグラフィックデザインは同じ ――

池　田　　竣

前　中　　妙

第一章　浮世絵は芸術でなくグラフィックデザイン

≪明治に浮世絵は新聞と代替≫

美術学科の僚友、前中妙女史の浮世絵コレクションに触発され、長年考えていたことを整理する絶好の機会となり、小論としたものである。女史の浮世絵は大部分が明治期のものであり、浮世絵が消滅しグラフィックデザインに代替する時期のものである。特に「新聞錦絵」は、その名の通り新聞と浮世絵の同居を意味するものであり、浮世絵消滅時の最後の輝きを彷彿させるものである。

新聞はグラフィックデザインの範疇であり、錦絵は浮世絵の範疇である、代替期の二人三脚、と把えることもできる。グラフィックデザインを芸術としないのが普通なら、同類の浮世絵を芸術とするのはおかしいといえる。

浮世絵中に、芸術作品と呼ぶに価するものが存在することは明白である、同じことはグラフィックデザインにもいえる。私の主旨は浮世絵中の芸術と呼べるものと、グラフィックデザイン中の芸術と呼べるものは、同じ事象であり、例外中の例外ということである。氷山の一角と喩えられ、水面上に浮ぶ９分の１だけの例外的顕在で、大部分は水面下の９分の８の存在である。氷山の一角だけを取り立てて、全体を軽視し芸術とするのがおかしいと思われる。

浮世絵を芸術とする誤解は、西洋人の見解と西洋一辺倒の浮世絵研究家の、近視眼によるものと思われる。西洋の美術館所蔵の浮世絵は多くは、例外なく氷山の一角、芸術といえる傑作ばかりなのも事実である。水面下の存在の浮世絵は殆ど西洋の美術館では見つからない。このことは、多分西洋人が日本字を無視したことに起因すると思える。浮世絵は絵だけでなく必ず文字が混在する、その文字を読めば、浮世絵は広告等の情報メディアであるのが、日本人なら理解できるはずである。これはグラフィックデザインにも同じ事と考えられる。

今世紀の曲り角の時期、特に後期印象派の画家達が、伝統的な技法の行き詰りで袋小路に陥っていた時、突破口として浮世絵の造形表現に目をつけたのであろう。造形表現だけに着眼すれば、情報メディアの部分は無視され、画家の琴線に触れた部分だけが過大評価されて、芸術視されたと思える。西洋一辺倒の浮世絵研究家が、北斎、写楽、広重等を過大評価するのは我慢できるとしても、国貞、国芳、芳年等を過小評価し、浮世絵を堕落させた張本人とするに至っては、ナンセンスの極みである。グラフィックデザインから見れば、北斎、写楽、広重は凄いのだけどワンパターンで退屈ともいえる。国貞、国芳、芳年こそ興味津々のエキサイティングな異例と感じられる。

浮世絵が消えて100年、その間に代替したグラフィックデザインが謳歌しているが日本の現在である。写真と印刷技術の変遷による木版刷りからの代替、技術の革新の歴史的必然と把えることもできる。大観すれば、手づくりから機械へ、大量生産による工業化時代への転換、出版、放送、映像のメディアの変化発展ともいえる。

手づくりの木版・浮世絵が消え、活字・写真の新聞に

代替、これは明治の文明開化の典型だった。日本が急速に西洋化に成功したのは、古いもの（浮世絵）は凡て捨て、新しいもの（新聞）は何でも受入る図式、ゼロからの出発がその要因と考えられる。第２次世界大戦後も同じだったと思う。

物売りが浮世絵で商品を包み手渡した明治期の情景は、今でも新聞で物を包み売り渡すのと同じと想像できる。使い捨ての消耗品である点でも、浮世絵とグラフィックデザインは同じである。

≪浮世絵とグラフィックデザインは同類≫

浮世絵にはクライアント（商人）、ユーザー（庶民）、さらにエージェント（版元）も存在する。浮世絵が木版の印刷メディアであっただけで、今のグラフィック（印刷の）デザインと何ら違わない。江戸時代と今の違いは、今はラジオ・映画・TV・出版、加えてインターネットの、多種のマスメディアが存在するが、江戸時代には浮世絵が唯一の存在。出版も含めて現代のグラフィックデザインは、江戸時代の浮世絵と同じメディアであるが、存在感は違う。江戸の浮世絵はマスメディアの絶対的存在であったが、これに比べて今のグラフィックデザインは、メディアとしては相対的存在である。

浮世絵は版元がアートディレクターとして、絵師（イラストレーター）に絵を描かせ、彫師（製版業）に彫らせ、刷師（印刷業）に刷らせた。この点もグラフィックテザインと同じである。浮世絵のレパートリーも、広告、玩具、報道、プロマイド、教育、観光等と、出版も含めた今のグラフィックデザインと殆ど重複する。特に新聞錦絵は上記のレパートリーの統合といえる存在であった。加えて浮世絵の到達した究極の終点といえる。

因みに新聞錦絵とは、新聞が発行された後その記事の中より、トピックや世相をピックアップ、浮世絵化したものである。新聞のモノクロの写真と活字では伝達不可能な、センセーショナルなビジュアル化が目的である。消えゆく浮世絵と、新しく生れた新聞の共存、新聞（毎日）と違って、今の週刊誌、特に写真週刊誌と同じ存在である。芳年は美人画、武者絵、残酷絵、お化け絵等に才能を見せたが、新聞錦絵の大天才といえる人物だった。

カレンダーはグラフィックデザインの一分野だが、浮世絵に「大小暦」があった。平凡でない面白味を求めて、江戸の商人達は金と暇にあかせて、アイデアを捻りパズルの極致といえる絵暦を生んだ。この時期に居合わせ、絵暦で一発当てて登場したのが春信である。春信を単なる芸術の面だけで評価するのは片手落ちというものであろう。

同じく広重の、「東海道五十三次」も大当り、大儲けの典型例で、４回もバージョンが繰り返された。広重は数年で220枚のバリエーションを描いたわけである。凡てが独創的で傑作である故に、芸術視されるのも、天才と称されるのも頷ける。また「張交絵」という別々の作品を一画面に張り交ぜて、作品に仕上げた浮世絵も、彼のアイデアとされている。並の才能では不可能な、構成力・レイアウト能力の発揮が見てとれる。

浮世絵の「双六絵」、「立版古」も今なら子供雑誌の付録のようなものである。立版古とは絵を切り抜き糊づけし立体とする遊びである。芝居に関するものが多いのは、江戸時代芝居がいかに大きな文化的存在であったことを示唆する。因みに立版古の「版古」とは木版のことだが、「立」は立体だけでなく、役者絵が「立絵」と呼ばれたり、現在も、立役者、立女形の名が残っているように、芝居に起因する。

「摺り物」、「引札」、「広告絵」の浮世絵は、宣伝臭さを少なくするための、実に見事なアイデアが見られる。特に広告絵はエージェントとクライアントの絶妙なタイアップの例が多い。呉服屋の広告絵は、街頭に大きく目立つ美人画と見せて、バックの暖簾には紋所、美人は町娘と分かり、流行の柄を競わせる図。絵師は着物の輪郭だけを描き、彫師はクライアントの意向で柄を彫り入るのである。店の紋は越後屋(三越)、大丸屋、松阪屋と一目瞭然である、紋所で艶を競う洗練さも脱帽である。

前中女史のコレクションに「横浜鉄道館蒸気車之図」があるが、これは「汽笛一声新橋を」の鉄道唱歌を想起させる。「心斎橋鉄橋の図」は私個人のリアルタイム記憶となる。昭和に堀を埋めて道路と地下駐車場に変ったが、その際、心斎橋のシンボルとして陸橋にガス灯だけが残

った。が平成には地下駐車場はショッピングモールと化し、心斎橋は名だけ残し、地下街の天井に水を流して堀の名残りとしたアイデアは、愚としか私には思えない。

立版古の「浪花高麗橋」、「浪華安治川外国館真写之図」も興味深い。浪花と浪華の違い……。「東京料理頗別品」の別品とはグルメ競べのなか、芸者（仲居？）の美人競べなのか、と興味が起る。「毛理嶋山官軍大勝利之図」も「勝てば官軍」を想起させ、残酷絵なのだがユーモラスな表現には恐れ入る。これだけの情報内容量を、今のメディアで伝えられるだろうかと、疑問も浮んでくる。

≪浮世絵は芸術の誤解は西洋の視点≫

1997年に前中女史と共同研究発表した際、ゲストに米国の僚友ジーン・イッポリット博士を迎えた。博士は東洋及び日本美術の専門家なので、浮世絵と西洋美術の関連について述べてくれた。その際、浮世絵に影響された絵画の例をスライドで見せ、「この様な奥行のない表現」と例示した。実は私にはそれが奥行のないものとは見えなかった。理論的には奥行不在の計算された構図なのだが、多分日本人には奥行があると感じられる。要するに日本人には人物が前にあり、背景に何か物があり重なって配置されてあれば、透視図的におかしくても奥行が感じられるのである。前述の広告絵で、美人が前面に配され背景に店の暖簾があれば、日本人には奥行があると感じとれるのである。西洋人には非透視図的なら奥行がないと感じられるのと、対称的と思われる。概して日本のイラストレーションは立体感を無視し、質感をより重視する傾向があるのも事実である。

この事は、特に後期印象派の画家達が、ルネッサンス以来の強固な写実の伝統で袋小路に迷い、脱出口を求めて、浮世絵の写実を無視した造形表現に衝撃を受けたのと一致する。日本描画法と西洋描画法のパラダイムの衝突であり、20世紀前衛美術運動へのパラダイム・シフトへも結びついた事象であったのであろう。

一般に浮世絵を芸術視する元凶となった、春信、清長、歌麿、北斎、写楽、広重の六大浮世絵師の作品は、単純明解の平明性が共通する。しかも天才的な独創性と個性の表出も共通する。文字を無視し絵の造形性だけで見れば芸術として何ら差し支えない。繰り返すがそれは氷山の一角の、特に際立つ巨匠達である。また特に西洋人好みの典型で、世界中の美術館所蔵のワンパターンである。文字を解釈し、情報メディアとして認識した上で評価すれば、造形表現だけで芸術視する愚の骨頂は犯さないはずである。グラフィックデザインの場合も同じ、世界中のポスター美術館所蔵の作品を芸術視、特にポスターだけが芸術とされるのも、同じく近視眼といえる。

≪秘画は浮世絵の例外視もおかしい≫

一般的に、浮世絵を芸術視する近視眼からは、秘画は例外的存在として、蚊帳の外に置かれている。浮世絵を神聖視するあまりに、秘画をポルノと極付けて除外する気持、理解はできてもおかしい。また全浮世絵の半分は秘画という点も無視できない。歌麿と北斎の傑作は秘画の方が多いとする説の方が正しい、と私には思われる。元来よりアンダーグラウンドの存在なので、幕府の禁止令から外れた、自在・無碍の表現、贅を尽した最高級の作品も生れる。秘画にしか作品のない浮世師の存在も事実なのである。

声高に秘画を研究すべきとは、気が引けるが、公刊半分、地下出版半分の浮世絵を、等価に扱わずしての浮世絵研究は、正に片手落ちであろう。秘画に似た、「危絵」、「枕絵」「わらい絵」も過小評価されている。特に「美人が着物の間から膚をのぞかせている」のが危絵だが、現在ではそれが何で危いのか理解できない。清楚な好奇心をそそる秀作としたい位である。幕府の禁止令すれすれが危絵の真意と考えると、創意工夫の妙が際立つのである。

ともかく、浮世絵は芸術、から脱して特に明治期の灯の消える最後の輝きにも注視したい。時には傍目八目も正視となりえなくもない。

第II章　個人蔵錦絵の背景と作品解説

この章の本論に入る前にお断りしておきます。

表記のテーマで、1997年12月に、大阪芸術大学藝術研究所が主催する、ART FORUM　第21回教員研究会において、共同研究者であります池田　竣教授と、当日、特別参加下さった米国サバンナ美術大学のJ・イッポリット博士と共に、私も発表を予定しておりましたが、当日体調をくずし参加する事が出来ませんでした。発表においては、錦絵26点のスライド97カットを池田教授を煩わせ、披露させていただきました。又、資料として関連錦絵29点を、情報センター・ギャラリーにおいて展示いたしましたが、何分短期間でありましたので、多くの方々に参観して頂く事も出来ず、又報告においても舌を尽くす事ができませんでしたので、改めて、この誌面をお借りしてご報告いたします。

Ⅱ－１－１　所蔵錦絵の背景

この一連の錦絵は、私の父、前中昌治（明治30年～平成元年＝1897～1989）の遺品の一つであります。父の意志で収集したものではなく、又　父も知人の遺品として譲り受けたものであります。このような事情から、これらの錦絵は特別な意図をもって収集された物ではありません。反ってこのような事情が、錦絵の本来の意味をより明確にしたと云えます。それは当時の状況を伺い知る事が出来る資料であることは、これらが当時の情報媒体の主流をなしていたと考えられるからであります。

収集者は不明ですが、父の知人（父より一世代前）のもう一世代前であろう事が、作品の構成状況から推測できます。明治に改元された頃には、すでに社会人で在ったことからして、1840年（天保年間）代前後の生まれであろうと想像出来ます。正にこの動乱期を駆け抜けた人間の歴史を、この錦絵が物語っているように思われます。

さて、この錦絵が手元に届きましたのが昭和30年代初めの頃かと思います。当時、錦絵に対する評価は、大変に低いものでしたが、北斎・写楽・広重と云った絵師の作品は、国内外を問わず格別の高い評価でありました。この蔵品中の「國貞（豊國Ⅲ）」「國芳」「國周」「芳年」等々については、浮世絵を堕落させた張本人と云った扱いをされておりました。これが、社会の一般的な認識でありましたから、これらの錦絵についても、興味を示すどころではなく、その存在すら私も忘れておりました。

その後40年近く経った昨今、アンティーク物の人気も高く骨董祭は大繁盛の呈、蔵品錦絵の類も結構な値で取引されているさまに刺激され、今回の錦絵確認の作業を開始した次第であります。

ですから、動機は大変に不純であります事を、ご了承願わねばなりません。

Ⅱ－１－２　所蔵錦絵の概要

この所蔵錦絵の概要は、件数にして146件、枚数にして279枚であります。１枚単独の物、２枚組、３枚組、６枚組、等々と混在しております。中には数枚の組物の内欠落したと思われる物件も見受けられます。

○これらを絵面（題材）で分別すると、

1）　歴史的事件や世相を題材　……35件
2）　江戸・東京等の名所を題材……39件
3）　美人・風俗等を題材　　……19件
4）　芝居・役者を題材　　……35件
5）　その他（相撲関係と各地の観光案内）…18件

○次に主な絵師を列記すると、

國貞、豊國、広重、國芳、英泉、芳年、國周、芳幾、國輝、國郷、國麿、國松、吟光、國政、孟斎、一景、清親、周重、周延、延一、探景(安治)、幾丸、斐章、貞広、國広、貞信、小信、芳瀧、芳光、芳雪、茂広、その他不明、となります。

〈但〉　貞広以下８人は、特に上方を中心に活躍した絵師達です。

Ⅱ－１－３　錦絵と世相の関係

蔵品錦絵を、時間軸で整理し、並列すると次頁の様な年表が出来上がる。今回のテーマのキーワードである「情報・メディア・浮世絵」の関係が、明確に浮かび上ってきます。

幕末～明治中期　世相と蔵品錦絵関係年表

西暦	和暦	世相・風俗・事件	所蔵錦絵作品名
1839	天保10年	・ダゲレオタイプ写真術発明（仏）	◆江戸名所（広重）
1848	嘉永元年	・日本に写真機が渡来（島津斉彬）	◆江戸自慢三十六景（喜翁豊國・広重Ⅲ）
1857	安政４年	・市来四郎他、島津斉彬の肖像写真成功	
1862	文久２年	・この頃、下岡蓮杖が横浜に写真館を開設	
1868	明治元年	・戊辰戦争（鳥羽伏見の戦）慶喜大阪から江戸へ	◆毛理嶋山官軍大勝利之図（照皇斎國広）……1
		・英公使パークス、大坂東本願寺掛所で、信任状を天皇に提出	◆浪華安治川外国館真写之図（長谷川小信）……2
		・天皇、即位の大礼を上げる	◆神武天皇御即位大慶祝（長谷川貞信）……3
		・築地居留地に、築地ホテル館完成	◆東京築地ホテル館図（松花楼幾丸）……4
1870	明治３年	・東京　横浜間電信開通	◆東京名所第一　日本橋模様替繁栄図（國輝）……5
		・大阪　高麗橋に鉄橋を架設	◆起こし絵　浪花高麗鉄道（貞信）……7-1
1871	明治４年	・郵便開始	◆東京料理頗別品　芝明神車屋（芳年）
		・廃藩置県の詔書	◆　〃　御厩河岸常磐（芳年）……8-1
		・新貨条令	◆　〃　栄女町酔月楼（芳年）……8-2
1872	明治５年	・新橋、横浜間鉄道開業	◆横浜鉄道館蒸気車之図（広重Ⅲ）……6
		・内田九一「御真影」を撮る	
1873	明治６年	・大阪、心斎橋に鉄橋を架設	◆心斎橋鉄橋之図（照皇亭貞広）……7-2
		・ウィーン万国博覧会	◆一魁随筆　犬塚信乃・犬飼見八（芳年）
		・西郷の遣韓使節が無期延期となり西郷辞職	◆　〃　洞ケ峠に嶋左近　斎藤大八を討つ（芳年）
		・活版印刷と活字、印刷機の製造販売の開始	◆　〃　曽我十郎祐成　曽我五郎時致（芳年）
		・学制を制定	◆紫式部源語を艸する図
1874	明治７年	・大阪～神戸間鐵道開通	◆起こし絵　蒸気車駅舎（小信）
		・印刷用インク原料として顔料を製造	
		・佐賀の乱、征韓論分裂で、江藤新平の反乱	◆皇國一新見聞誌　佐賀の事件（芳年）……9-1
		・熊本県士族太田黒伴雄ら、熊本鎮台を襲撃	◆皇國一新見聞誌　上野三橋の戦争（芳年）……9-2
		・岸田吟光、記者として台湾へ従軍	◆皇國一新見聞誌　熊本県の反乱（進斎）
1875	明治８年	・イタリア人画家、銅版画家キョソーネ来日	
		・各種錦絵新聞多数発刊	◆大阪日々新聞　絵本角中芝居大勝遷図（茂広）……12
1877	明治10年	・西南戦争（西郷隆盛、自刃。逆賊となる）	◆絵入り新聞の投書　最期星（孟斎）……10
		・西南戦争もの流行	◆西国鎮静諸将天盃賜図（楊洲斎周延）……11
		・英人建築家コンドル、工部大学校教授として来日	◆鹿児島軍記　賊徒本陣の段（長谷川貞信）
		・第１回内国勧業博覧会開会	◆歌舞伎十八番　暫　九代目団十郎（國周）……13
			◆皇都会席別品競　元大工町中安（芳年）
1878	明治11年	・新富座、団十郎の西郷隆盛好演で80日余大入	◆皇都会席別品競　禿　あげは（芳年）
			◆三都大相撲取組之図（貞信）……17
			◆役者絵　片岡我当他（安達吟光）
			◆役者絵　市川団十郎（國周）
			◆豊臣勲功記　木下須股城一夜建築之図（年□）
1879	明治12年	・新富座本建築落成、米前大統領グラント観劇	◆大日本史略図会（芳年）
		・久松座竣工	
		・「写真新聞」全真社　創刊	◆久松町劇場久松座繁栄図（広重Ⅲ）……14
			◆久松座新狂言（國周）……15
1880	明治13年	・こんにゃく版印刷始まる	◆両国花火之図（清親）……16-1
			◆浅草寺年乃市（清親）……16-2
1881	明治14年	・第２回内国勧業博覧会、上野公園	◆開花朧能遊羅ん（周延）
		・三省堂創業	◆役者絵　市川左団次他（周延）
			◆歌舞伎　御殿山桜木草紙（國周）
1882	明治15年	・壬午事変、花房公使により済物浦条約が成る	◆花房公使　朝鮮國応接之図（東洋斎斐章）……19
		・「写真新報」銀座朝陽社　創刊	◆古今大将揃　市川左団次他（天斎國松）
			◆歌舞伎　見立水滸伝（橋本直義）
1883	明治16年	・コンドル設計の鹿鳴館成る	
1884	明治17年	・新設の不忍池馬場で、第１回秋季競馬会開催	◆上野不忍競馬図（周延）……20
		・初代　梅ケ谷藤太郎、横綱を免許	◆梅ケ谷藤太郎（國明）……18-1
			◆響矢熊十郎（貞信）……18-2
1888	明治21年	・和製自転車の製造開始	◆女礼式之図（周延）
			◆佳人音曲之図（周延）
1889	明治22年	・大日本帝国憲法発布（洋服屋繁盛）	◆憲法発布式之図（探景）……21
			◆伊勢おかげ参之図（不明）
1890	明治23年	・この頃、文明開化で洋風化が進んだ反動で、礼式を見なおす風潮が出る	◆花檜給金附（國貞）
			◆富家の別荘（周延）
			◆大日本帝国勝域之一　日光山之全景（安達吟光）
			◆旧幕時代　東叡山遊覧之図（周延）
1894	明治27年	・浅草に12階の凌雲閣が開場	◆浅草公園遊覧之図（周延）……22
			◆亀井戸臥龍梅（延一）
1895	明治28年	・日清戦争（亀井玄明、私設写真班編成し従軍）	
		・下関条約	◆四季の詠　□川の蛍（周延）
		・大阪、活動写真公開	
1897	明治30年		◆徳川時代貴婦人月見の図（周延）……23

注：この年表は、錦絵の発行年及び事件との関係が明確な作品のみで構成しております。
　また錦絵の後にある番号は、今回掲載した図番です。ご参照ください。

(1)毛理嶋山官軍大勝利之図　　6枚続　明治元年

○照皇斎國広画（生没年未詳）大阪の人。
作画期は文化末から明治元年頃で、天満屋からの刊行が多い事から版元と同一人か？

○鳥羽伏見の戦いを切っ掛けに戊辰戦争へと発展する。
題名の毛理は長州藩（毛利）、嶋は薩摩藩（島津）、山は土佐藩（山内）の三藩連合の政府軍、即ち官軍と幕府軍との戦の図である。右3枚には政府軍の勝ち戦の↗

(2)浪華安治川外国館真写之図　　3枚続　明治元年

○長谷川小信（嘉永元年～昭和15年＝1848～1940）。初代長谷川貞信の長男。初め小信と称し明治8年父の隠居以後貞信を襲名する。

○これには慶応4年とあり、未だ改元されていない頃のものである。大阪行幸中の天皇に、英国公使パークスが、國書を提出した時の一行の図である。これは外国が新政府を承認した初めである。

↗ 模様が、炎上する伏見城砲撃の手を認めない官軍の姿を、そして左3枚には、負傷し敗走する幕府軍が描かれ大阪城も炎の海となっている。将軍慶喜はすでに大阪を発ち江戸へと脱出していた。

又この種の絵は、当時江戸でははばかられたようで、上方で多く制作された。例えば照皇亭貞広の「山崎の大合戦図」などでは、秀吉と光秀の山崎の合戦になぞらえて描かれたりしている。

(3)神武天皇御即位大慶祝　　3枚続　明治元年

○長谷川貞信（文化6年～明治12年＝1809～1879）大阪の人。貞升の門人で作画期は、天保から明治にかけて活躍。上方の代表的絵師の一人。

○明治元年8月27日京都御所紫宸殿において、明治天皇の即位の大礼が行われた。唐制から和装の束帯に服装も変化した。又明治天皇を神武天皇に重ね合わせ、より王政復興を強調した図柄になっている。

(4)東京築地ホテル館図　3枚続　明治元年

○松花楼幾丸(生没年未詳)武田交来の四男。落合芳幾の門人。東京日々新聞の印刷部で活躍。

○横浜の居留地で技術を習得した2代目清水喜助が手掛けた「築地ホテル館」である。当時この洋風建築は、大変に珍しく町の風景も一変したと想像できる。多くの絵師達の格好の題材として様々な角度から描かれている。

(5)日本橋御模様替繁栄之図 3枚続　明治初期

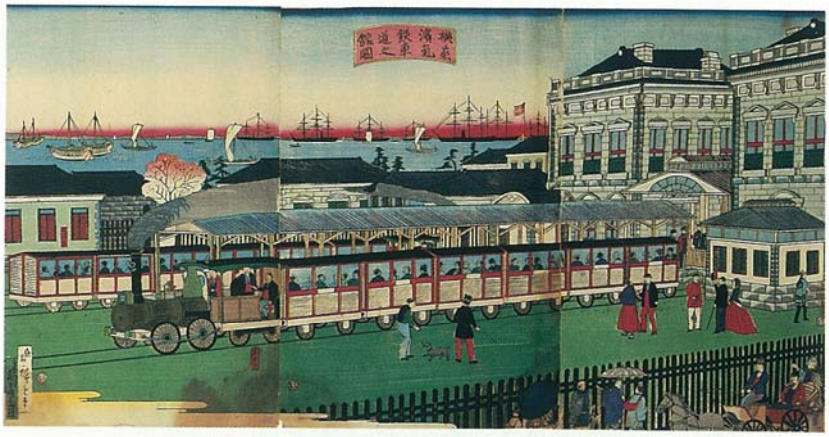
○國輝II（天保元年～明治7年＝1808～1876)。三代豊國の門人。慶応元年に二代國輝となる。作画期は、幕末から明治。

○明治3年に、東京～横浜間に電信が開通する。右の洋風建築の玄関には「電信所」の看板が見え、馬車・人力車・洋装・パラソル等、日本橋界隈の近代化して行く様子がうかがえる。

(6)横浜鐵道館蒸気車之図　3枚続　明治5年

○広重III（天保13年～明治27年＝1842～1894)。初代広重の門人。慶応3年三代広重を継ぐ。開化絵を積極的に描く。

○明治5年　新橋～横浜に鐵道が開業。「小児を寝かせ横浜を発ち、品川での用をたして帰浜しても、未だ児は眠ったままであった」と。上等片道が1円50銭。この頃大工の手間賃が40銭であった。



(7-1)起こし絵　浪花高麗鉄橋

○貞信（前掲）　1枚　明治3年以降

○明治3年に大阪で始めての鉄橋「くろがね橋」の愛称で呼ばれ、錦絵の玩具として立版古にまでなった高麗橋鉄橋である。

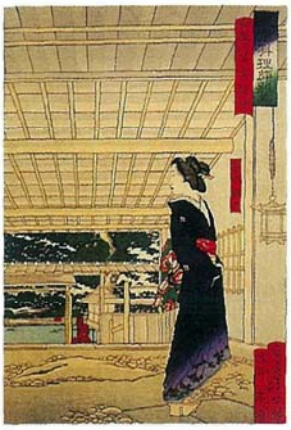
(7-2)心斎橋鉄橋之図　1枚　明治6年

○照皇亭貞広

○明治6年、ドイツ製の鉄製のトラス橋を架橋。今も花博公園の篠懸橋として健在。

7－1

7－2



8－1

8－2

(8-1)東京料理頗別品　御厩河岸　常盤
芳年　校合年麿　　1枚　明治4年頃

(8-2)東京料理頗別品　采女町　酔月楼
芳年　校合年景　　1枚　明治4年頃

○月岡芳年（天保10年～明治25年＝1839～1892)。國芳の門人。はじめ役者絵や武者絵を得意としたが、後、新聞押し絵も手掛けた。

○この頃、社交や接待の場としての料亭が繁盛。酔月楼は幕末からの料亭。

9－1

9－2

(9-1)皇國一新見聞誌　佐賀の事件
大蘇芳年・年直画　　1枚　明治9年

○江藤新平と島義勇が蜂起した佐賀の反乱軍で、大久保利通が、自ら鎮圧の指揮を采った。

(9-2)皇國一新見聞誌　熊本県の単乱
進斎　　1枚　明治9年

○明治9年、神風連の一党が熊本鎮台を襲撃した事件。士族解体による不満分子が多く、　西南戦争の前哨といった感じであった。

⑽絵入り新聞の投書　最期星
2枚続　明治10年

○孟斎（歌川芳虎：生没年未詳）國芳の門人で、後破門。天保から明治20年頃まで活躍した。

○西南戦争で西郷隆盛が討死し、逆賊となった西郷をもじって「最期星」と。本音を云うも、多少はばかられるといったところを、巷の声に置き換え諷刺している。

⑾西国鎮静諸将天盃賜図 3枚続　明治10年頃

○楊洲斎周延（橋本直義：天保9年～大正元年＝1838～1912)。國芳、國貞、後國周の門人。國周の弟子中では第一人者。宮廷画や風俗画を得意とした。

○西南戦争も終わり、出陣していた将兵達も順次帰京し、11月10日に宮中において、慰労の晩餐会が催された。その時の様子を絵にしたものである。

⑫大阪日々新聞　絵本角中芝居大勝選図

○菊水茂広（未詳）　　（部分）　2枚組

○明治8年には、大阪でも茂広画柳桜の文で「大阪日々新聞」が発行された。この絵にある役者は明治初期に、賑わした實川延若・中村宗十郎等の名が見え、大芝居の「角の芝居」と「中の芝居」が競いあっていた様子を表現している。

⑬歌舞伎十八番　しばらく 2枚組　明治11年

○國周（豊原國周：天保6年～明治33年＝1835～1900）。三代豊國に入門、歌川を名乗らず豊原を名乗る。明治期の役者絵の第一人者で、大首絵にその力量を発揮。

○明治7年、河原崎権之助が九世市川団十郎を襲名、新しく「活つ歴」をつくり歌舞伎を高尚なものにまで仕立て上げ、明治の劇聖と云われ、「暫」は当たり役。

⑭久松町劇場久松座繁栄図 3枚続　明治12年

○広重Ⅲ（前掲）

○明治11年に開館した新富座では、団十郎の西郷隆盛が大入り。12年には米国前大統領も観劇と、芝居は大好評。そして久松座も竣工。これは、久松座の当時の賑わいの様子を描いたものである。新富座の開館の時には、劇場関係者は洋服着用であったと云う。

⑮久松座新狂言　　3枚続　明治13年

○國周（前掲）

○東京の人気役者は新富座に、久松座では大阪から助高屋高助・尾上多見蔵・中村翫雀・尾上多賀之丞・市川九蔵といった陣容で幕を開けた。

屋上には納涼台が設けられ、だれでも自由に出入り出来たが、その後の2度の火災で消失、今は明治座となっている。

16-1

16-2

(16-1)両国花火の図　　1枚　明治13年

(16-2)浅草寺年乃市　　1枚　明治14年

○清親（小林清親：弘化4年～大正4年＝1847～1915）。下岡蓮杖・河鍋暁斎等と親交、英国人ワーグマンに洋画を学び、明治9年には光線画と称する錦絵を発表する。石版画や銅版画を研究し、その後の創作版画に多大の影響を与えた。

○この2点は、洋風木版画での彼の代表作。

⑰三都大相撲取組之図　　3枚続　明治11年

○貞信（前掲）

○江戸時代から、東京・京都・大阪の三都市で年に春と冬の定場所があった。梅ヶ谷と響矢の取り組みである。未だ梅ヶ谷が横綱免許を受ける前の大阪での取り組みであろう。

18-1

18-2

(18-1)梅ヶ谷藤太郎　**(国明II)**　1枚

(18-2)響矢熊十郎　**(貞信)**　1枚

○國明II（天保6年～明治21年＝1835～1888）。初代國明の弟、初世國貞（豊國III）の門人。役者絵・相撲絵・風俗画をかく。

○明治17年、初代梅ヶ谷藤太郎に横綱を免許。梅ヶ谷は福岡出身で大阪の湊部屋に所属していた。東京でも人気が高く天覧相撲で土俵入りをもした。

⑲花房公使　朝鮮國応接之図

○東洋斎斐章（未詳）　3枚続　明治15年

○明治15年8月に済物浦条約を締結。済物浦は現在の仁川の古称である。事件の背景は省略しますが、内容は首謀者の逮捕・賠償金50万円・謝罪使の派遣・開港地の拡大と云ったものでした。李裕元・金宏集・宗近洙・中国の馬建忠等の名が見え、アジア近代史の一小間である。

⑳上野不忍競馬ノ図　　3枚続　明治17年

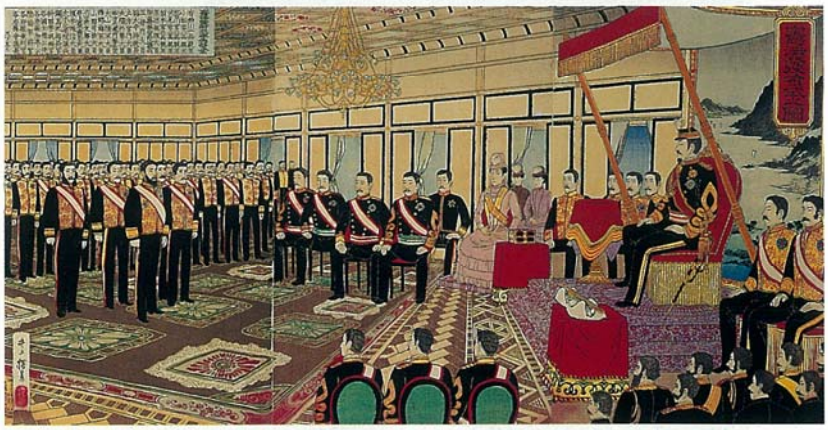
○楊洲周延（前掲）

○明治17年に上野不忍池畔に競馬場が竣工し、開場式には天皇も臨席され、70余頭の馬が8組に別れ池の巡りを競争した。未だ女官達の服装は和服で、翌年頃からは鹿鳴館の影響が反映した洋装へと変化する。空に浮かんでいるのは、祝賀花火に仕込まれた玩具の動物である。

㉑憲法発布式之図　　3枚続　明治22年

○井上探景（安治：元治元年～明治22年＝1864～1889）。始め芳年に絵を学んだが、後小林清親の門人となり、風景画において勝れた筆致を見せた。

○明治政府の懸案であった憲法制定は、14年から伊藤博文らの憲法調査、19年からの憲法草案、21年に草案審議、やっと明治22年2月11日に発布された。



㉒浅草公園遊覧之図　　3枚続　明治24年

○楊洲周延（前掲）

○明治23年に開場した浅草十二階の凌雲閣が採り入れられた浅草の新しい風景。上野公園と比較され、「上野は眺望の、浅草は飲食の公園」と云われた。川上音次郎のおっぺけぺー節が流行し、浅草独自の文化が形成されたのもこの頃である。

㉓徳川時代貴婦人月見の図　3枚続　明治30年

○楊洲周延（前掲）

○明治維新後、文明開化の名の元に推し進められた西洋崇拝は鹿鳴館時代へと進み、日本の伝統的文化や気風は一気に衰退する。明治20年頃より、その反動が表れる。この絵も、旧幕時代の懐古趣味にとどまらず、日本の伝統文化や価値観の再発見を促している。

Ⅱ－２－２　時代を証言した錦絵

今回は、単に所蔵錦絵を時間軸に沿って並列しただけでありますが、予想以上に時事的な報道の意味合いが強く表出している事に驚かされます。当時の錦絵存在の意味を明確にしたく、1839年に発明された写真術、そして印刷技術の導入と発達、手漉和紙からパルプ紙の量産、新聞の創刊と発展と云ったように、明治のこの時期には様々な変革がありました。これらの関係においての錦絵の存在意味を考究するつもりでしたが、紙数の都合も然る事ながら、資料不足の為、又の機会にしたいと思います。今回は兎に角、錦絵の持つ「力」だけでも感じて頂ければと考え、作品紹介に専一した次第です。

先に「時事的報道」の意味が強いと記しました。これについては先の研究発表の際に、５つの項目をたてましたが、簡単にその内容を述べておきます。

1)　大衆社会のニーズに速やかに対応している。
何らかの事件や戦争等々が起こると、大衆の要望に呼応し、その事件の真実に迫る事は勿論、内容によっては誇大に表現し読者の心を摑んでいた。

2)　木版といえども、速報性があった。
予測のつく出来事等は、先に作業に取り掛かり、タイミング良く出版する。又、急を要するものは多くの彫師に分業させ時間を短縮していた。

3)　マスメディアとしての機能をもっていた。
唯一の大量の情報を提供出来る媒体は、錦絵であり、新聞等は未だ主流に成り得ていなかった。

4)　真実性の報道。
錦絵には、誇張された部分も在るが、総体的には史実に忠実で現在の写真の役割を担っていたと考えられる。

5)　カラーの世界に覚醒。
幕末から多色摺が主流となると、一層の臨場感を錦絵で表現出来るようになり、事の理解を促した。

このように概観すると、江戸から明治への大きな変化は、情報の大衆化であると考えられます。これが時の錦絵を支えた大きな要因であります。明治６年に学制が制度化されたとは云え、未だ識字率は低かった。「ちんぷんかんぷん」という言葉が生まれたのもこの頃であります。当時、文字は、情報伝達の手段として十分にその役を果たせず、大衆が理解し得る言語は、やはり視覚に訴え掛けるのが早道であった。しかし、社会の変化によって大衆は、知識欲や情報欲に貧欲となり、これを充足させてくれたのが、「錦絵」であった事は想像に難く在りません。それだけに、錦絵の「情報的内容量」は、現在のテレビや新聞・雑誌といったメディアがミックスされたものに匹敵する程の効果があったと考えられます。

当時の錦絵には、何故このように力が存在したかを考える時、今の多様化したメディアの一つとしてではなく、当時の庶民にとって「錦絵」が唯一の媒体であった事がそれを証明しております。又、当時の出版のあり様においても、絵師が版元を兼ねることも往々にしてあり、それだけに自己責任も重大となって、「絵」に「力」を生むことになり、文字や言葉以上の気迫で、事のなりたちを語っていたのである。

追記

共同執筆者の池田　竣教授には何かとお世話をお掛け致しました。この誌面を借りお礼申し上げます。

又、掲載写真は、近藤　大助教授を煩わせました。感謝致します。（但し7-1，7-2，8-1，8-2，9-1，9-2，13，16-1，16-2，18-1，18-2，23を除く）

参考資料・引用文献等については、紙数の関係で省略させて頂きますが、主なものだけを下記に記します。

○原色浮世絵大百科辞典　全11巻、○錦絵　幕末明治の歴史　全12巻、○國書人名辞典　１～３巻、○近代日本のデザイン文化史、○大阪の錦絵新聞、○明治新聞事始め、○浮世絵探険、○開化期の絵師　小林清親、○明治の鉄道錦絵、○初代長谷川貞信版画作品一覧、○引き札絵ビラ風俗史、○新修大阪市史　全10巻、○大阪の橋、○展覧会カタログ等々及びその他多数。